

カラー

INTERVIEW

黛まどかさん

(俳人)

27

生涯学習の総合情報誌

マナビィ



2006年

1月号

No.55

文部科学省編集

特集 「誰にもやさしい博物館」づくり

- 鼎談 誰にもやさしい博物館の在り方
 <常磐大学コミュニティ振興学部教授・常磐大学大学院
 ミュージアムマネジメント領域教授 水嶋英治／
 東京都老人総合研究所副所長 鈴木隆雄／
 財団法人日本博物館協会会長 中川志郎> 4
- 施策説明 「誰にもやさしい博物館づくり事業」について
 <文部科学省生涯学習政策局社会教育課> 9
- 提言 博物館にみるマーケティングとコミュニケーション
 <東日本旅客鉄道株式会社顧問 江上節子> 10
- 事例紹介① ボランティアとつくる展示案内
 <東京都江戸東京博物館> 12
- 事例紹介② 博物館と福祉部局の連携実践
 <師勝町歴史民俗資料館> 13
- 事例紹介③ 誰にでもやさしい“ユニバーサル・ミュージアム”を目指して
 <神奈川県立生命の星・地球博物館> 14
- レポート 第53回全国博物館大会レポート
 <文部科学省生涯学習政策局社会教育課> 15

まなびのまち 鹿児島県名瀬市 16

住民主体のまちづくりを担う「岐阜県コミュニティ診断士」
 <岐阜県県民政策室> 20

●保護者・地域とともに創る「地域立の学校」
 <東京都足立区立五反野小学校> 32

●地域の中でアートを通じた出会いの場をつくる「ACTION!」
 <NPO法人芸術家と子どもたち> 36

日本全国「きもの」普及
 <学校法人清水学園> 40

くちくまのまちのボランティア活動
 <和歌山県上富田町> 42

小さくても元気に野に咲く「たんぽぽ」
 <育児サークルたんぽぽ> 45

●こんにちは、厚生労働省職業能力開発局 24
 ●生涯学習地域レポート 48
 ●Manabee News 50
 ●編集後記 54

連載

まなびの新風

—あのみち・このまち—

大学との連携によるまちづくり

事例クローズアップ

挑戦! 企業が取り組む生涯学習

やってるよ! ボランティア
 ~自分も輝く 地域も輝く~

子育てするならわがまちで

「誰にもやさしい博物館」づくり

鼎談 誰にもやさしい博物館の在り方

出席者（発言順・敬称略）

水嶋英治

鈴木隆雄

中川志郎

常磐大学コミュニティ振興学部教授・

常磐大学大学院ミュージアムマネジメント領域教授

東京都老人総合研究所副所長

財団法人日本博物館協会会長

高齢者のイメージと実態の差

水嶋 本日は「誰にもやさしい博物館の在り方」についてお話しただきたいと思います。博物館の振興策を考えると、国民のニーズをキャッチしながら時代の変化に対応していくことが大事であると思います。その際、今後の高齢化社会や生涯学習社会に対応していくためには博物館はいかにあるべきかがテーマとして挙がってくると思います。本日は、「高齢者と博物館の関係」「リアフリー」「誰にもやさしい博物館の在り方」とその課題といったテーマを中心にお話を伺いたいと思います。まず、高齢者の実態についてお伺いしたいと思います。

鈴木 高齢社会へ移行する時間について、日本と欧米を比べた場合、例えばフランスなんかは、一〇〇年ぐらいかかっているところを日本は二五年ぐらいで高齢社会になっているんですね。これで明らかのように、日本は進行が非常に早いということなんです。そのために、我々が高齢者といった場合つい一世代、二世代前の高齢者と同じと錯覚してしまう傾向があります。しかし、実際にここ一〇年、二〇年といった尺度で高齢者の健康度を計ってみると、かつての高齢者と全然違う、非常に健康度の高い、若々しい方々が、新しい高齢者世代になっていくわけですが、この方々はおそらく社会的経験、国際化、ITの経験、フィットネスクラブなどへの参加、健康に対する情報の取組など、あらゆる面で相当に活動度の高い方々だと思います。ややもすると、高齢者が増え

ると、経済活動が低迷して活性度の低い社会になると言われておりますが、それは間違いで、非常に活力の高い方々が新しい世代となつて社会を引っ張っていくと思います。

今話題になっているのは、例えば博物館でも六五歳以上を無料にしている所が多いですね。このように六五歳以上が高齢者という定義をもつて、様々な社会のシステム上、高齢者は常に与えられる側の存在として位置づけてよいのかということなんです。かつての六五歳以上の感覚は、今は七五歳くらいでないと合わないくなっているんです。

水嶋 そうしますと高齢者というのは、過去と比較して精神的にも肉体的にも違いますし、六五歳と八五歳では単純に二〇年の開きがありますから、そこでもだいぶ違ってきているということでしょうか。

鈴木 そうですね。身体的な機能はものすごく高くなつてきています。この一〇年間で私も東京都のデータで見ると、五歳から七歳は若返っています。また、六五歳の人と八五歳の人を一括りにして高齢者といってしまうのですが、実は高齢者の中にも世代の差が随分あって、物の考え方や若い時に経験してきたものが随分変わっているんです。そういう高齢者を一括りにして、高齢者対策ということで整理をしていることが、本当に適切なものかということは、よく考える必要があると思います。

水嶋 そうすると博物館で考えた場合、高齢者というものをバリエーションの観点だけではとらえてはいけないということでしょうか。中川 博物館で感じることは、ここ一五年くらいで博物館に来館する高齢者の方々が増えてきていると思います。また、その中身も、従来の高齢者にあつた、人にものを教えるということが好きな方々もさることながら、知的好奇心が旺盛な方々が増えています。例えば、三〇人位の集団に対して説明をした場合、そのうち手を挙げて質問をするのは大概高齢者で、それにつられて若い人が質問するような状況なんです。これは昔とは反対の傾向です。これには、二つの理由があると思います。一つは、生涯すべての人間は学んでいくという、生涯学習社会という考え方が根付いたことだと思えます。この考え方は人間の本性にも基づくものであつて、

社会において実感として感じる段階に来ていると思います。二つ目は、今までの博物館はそのような段階にある方々に対応するような手法の集積を持ってきたのではなく、生涯学習の最先端にいる高齢者の知識の習得意欲の高まりに対応出来なく、あふたしているといえます。しかしそれはもう、大きなトレンドとして、博物館の存在意義を問われていると思います。高齢者に対して博物館がいかにあるべきかということについては、鈴木さんのお話を聞きながら、土台から考え直さないとけないなと感じました。

水嶋 博物館に限らず、高齢者の知的好奇心の高まりという社会全般の傾向はあるのでしょうか。

鈴木 知的好奇心が上がつているのは間違いないです。東京都において、高齢者の余暇時間の過ごし方を調査したことがあります。中川さんがおっしゃったように、研究や学習といった分野が非常に伸びてきている傾向があります。これは、前期高齢者という比較的若い六五歳から七四歳の方々、七五歳以上の後期高齢者のいずれも同じ傾向があります。もちろん地域による差は考慮しなければなりませんが、海外経験をはじめ、豊かな経験をもっている、いわゆる団塊の世代の方々が新しい高齢者の世代に入ってくることで、この知的好奇心も、より幅広いものになっていくと思います。

水嶋 それでは、このような知的好奇心によって蓄えられた知識や経験を博物館に還元していただくためには、博物館にボランティアなどの形で参画する方々が考えられますが、この辺りの状況についてはいかがでしょうか。

中川 博物館が多様なメニューを用意した場合、一番先に消化するのは高齢者なんです。高齢者の方は人生経験の中で様々な知識と経験を持って、自分の中で蓄積してきたものが若者よりはるかに大きいわけです。そうすると博物館のメニューは、従来は例えば一〇しかなかったのが、三〇に増やしても高齢者には非常によく迎えていただけるんです。博物館は社会教育施設の中でも、科学、歴史、美術博物館といったように、最もバリエーションに富んだ施設だと思いますが、今後の博物館というのは、高齢者を対象にしてメニューを広げていくことによって、むしろ高齢者の方から、



鈴木隆雄（すずき たかお） 東京都老人総合研究所副所長、東京大学大学院客員教授
北海道出身。専門分野は老年学、疫学、古病理学。札幌医科大学助教授、東京都老人総合研究所疫学部門研究室長を経て、平成12年より現職。著書に『日本人の健康・身体データ集―1』『骨の事典』ほか。

水嶋 いわゆる「二〇〇七年問題」、団塊の世代が大量退職しますね。その時に博物館に限らず、社会的な高齢者対応のスタッフトレーニングというのは、されているんでしょうか。

中川 対応については、どのようにお考えになりますか。
鈴木 高齢者や身体に障害を持っている方のために特別なことをするということについては、正直言って博物館は遅れていたと思います。しかし今や、公共的な施設というのは、当然措置をしなければならないことが、法的にも、社会的認識上もそうなっています。物理的な整備については、博物館においても進んでいます。
中川 ですが、お迎えする博物館スタッフの対応の心、そこところは依然として、施設が変わった程には変わっていない。だからせっかくお金をかけて設備を作っても、それを十分にハンディを持った方に活用してもらうためのスタッフトレーニングの必要性があったり、バリアフリーの担当者はいても、その人が全てやるような錯覚があったりというように、こういった部分については、残念ながらもう一度むけないといけないという気がするんです。バリアフリーの対応というのは全てのスタッフが、そういう心を持っていないとほとんど機能しないわけです。これを進める対応方法とかスタッフトレーニングという部分のマニュアルは、日本博物館協会においても残念ながらまだ出ておらず課題になっています。



中川志郎（なかがわ しろう） 財団法人日本博物館協会会長、茨城県ミュージアムパーク茨城県自然博物館名誉館長
茨城県出身。東京都恩賜上野動物園長、財団法人東京都動物園協会理事長、ミュージアムパーク茨城県自然博物館館長を経て現職。現在、文部科学省独立行政法人評価委員会国立科学博物館部会委員、環境省中央環境審議会動物愛護部会委員、環境省野生生物保護対策検討委員会としても活躍。

鈴木 高齢社会になって、高齢者に対するイメージが二〇年前の高齢者や変わっていないように、障害を持った方に対して、ソーシャルインクルージョン（※八頁）という概念はまだまだ認知されていない部分だと思っています。そういう意味で、団塊の世代の方は、障害を持った方々のソーシャルインクルージョンに関しては、より深い教育もあったし、そのようなことが言われた中で育った世代ですから、社会の一員として、一緒に過ごしていくんだという意識は高くなると思うんです。今後、博物館も含めて、実際にボランティアをしていくようなことも、ごく普通に行われてくるだろうと思います。
中川 私の館の場合、ボランティアと友の会というものを分けてないんです。普通、友の会会員は博物館からサービスを提供される側で、ボランティアとは立場が逆なわけです。しかし、その概念は今や大きく変わってきていると思います。それは、ボランティアも友の会も博物館のサポーター、あるいは一緒に事業をやっていくパートナーだという考え方です。友の会のメンバーが事業に関与して、博物館事業を隆盛にして、そのことによって自分たちもエンジョイしていくという形に変わってきているんです。このように、友の会もボランティアも博物館の事業を支えるパートナーになるという形になると、博物館の事業が地域に根付くわけです。このようになることで、その博物館の「博物館力」といったものが、飛躍的に増すんです。



水嶋英治（みずしま えいじ） 常盤大学コミュニティ振興学部教授、常盤大学大学院ミュージアムマネジメント領域教授
神奈川県出身。専門分野は博物館学、文化財保存管理論、博物館情報学。日本科学技術振興財団・科学技術館にて展示企画・設計に従事後、ラ・ヴィレット科学産業都市（仏）勤務を経て、平成15年10月より現職。現在、中央教育審議会生涯学習分科会専門委員、日本ミュージアムマネジメント学会常任理事としても活躍。

水嶋 壮年、若年、子どもの方に裾野を広げていくことになるのではないかと思います。今後は、そこから日本の文化というのは広がっていくんじゃないかと、そういう期待感さえあるんです。
中川 そのような講座は博物館の学芸員が企画するのですか。あるいは高齢者が自ら企画して、それを社会へ還元していくのでしょうか。

中川 博物館であるメニューを考えて提供した場合、当然当たらない場合もあるわけですが、若い人より高齢者の方から「こういう風にしたらいいんじゃないか」という意見をいただくことが多いです。この例のように、高齢者の方が今までの知的な集積を博物館という場を通して社会に還元していくことになるのではないかと思います。ここ数年、高齢者の方が考え、我々博物館の者がそれを後押しするという感じが徐々に強くなっているんですね。それは高齢者の健康度が高くなり、かつ知的な好奇心についても充実しているということではないでしょうか。

水嶋 古色蒼然とした博物館であっても、昔使ったものを見ると、昔を思い出して、心がリフレッシュして認知症の対策になるというような取組、例えば愛知県師勝町歴史民俗資料館や江戸東京博物館のような取組を、「回想法」というと聞いておりますけれども、博物館はそのような福祉の面からも役立つ施設なのですか。
鈴木 基本的にはまったくその通りだと思いますね。それは認知症

誰にもやさしい博物館を創るもの

水嶋 「誰にもやさしい博物館」といった場合に、博物館におけるバリアフリーという観点もありますが、例えば身体障害者に対する

の予防ということが、一番の大きなテーマになります。高齢者が昔馴染んだ生活の場にあったものが博物館にはたくさんあるわけですが、そういった物によって昔のことを一つ一つ回想していくことで、加齢とともに低下していく認知機能を抑制することが出来るのではないかと考えています。これは、評価の難しい面もありますが、確かに抑制している結果も出てきています。こういった博物館で、色々な昔馴染んだ物を利用した形で回想法が認知機能の低下の抑制に極めて有効であるということが分かれば、博物館の新しいキーワードとして、地域での健康支援の施設としても活用されてくるだろうと思いますね。
水嶋 そういった新しい博物館の使い方について、中川先生はどうお考えになりますか。
中川 そうですね。そのような回想法も一つの方法ですが、私が博物館で意外に思ったことがあるんです。それは、「生命の誕生」というテーマで受精について取り上げた展示をしたことがあって、私は若い人が興味を持つと思っていましたが、最もよく見ていたのは高齢者だったんです。それも、二〇分、三〇分と足を止めてです。初めて科学的に分かったと感激しているんです。高齢者には、昔のことを見せることで喜んでもらえると考えていたのですが、この件で私は足をすくわれた気がしました。最先端の知識であっても、「ああ、私知らなかった」という新鮮な驚きみたいなものが、高齢者にとっては極めて大きな刺激になる。あまり「高齢者は特別」とは、意識し過ぎない方がよいと思います。
鈴木 おっしゃるとおりですね。
中川 高齢者対策というと、なんとなく後ろ向きな施策になってしまいう気がするんですね。しかし、高齢者の実態は鈴木さんがおっしゃったようになり違う。高齢者でも、今初めて仕組みが分かったというような経験が出来る機能が、博物館にはあるんじゃないかなと思います。

この事業は、博物館が政府の観光立国施策と相まって増え続ける外国人旅行者をはじめ、年齢や障害の有無に関わらず、全ての人々にとって利用しやすい施設となるための方策等について調査研究を行っています。調査研究は政府の観光立国施策に対応する「外国人対応」、身体障害者も含めすべての人々が快適に生活出来る社会に対応した「バリアフリー対応」、及びこれからの高齢化社会に対応した「高齢者対応」の大きく三つの観点に基づき進めています。

平成一六年度の調査研究において、博物館等に対してアンケートを実施しておりますが、そのうち「外国人対応」と「バリアフリー対応」に関しての主な集

表1 外国人対応について

多く訪れている国は	アメリカ、韓国、中国の順
来館者の多い時期は	8月、4月、7月の順
最寄り駅に外国語による案内表示があるもの	日本語で表示されているうちの31%
Webサイト上で外国語によって情報提供している館	160館 (23%)
案内所マーク「?」や情報コーナー「i」の表示がある館	80館 (11%)
展示の案内等人的に対応することが可能な館	179館 (25%)
外国語によるパンフレットの準備	423館 (60%)
外国語によるガイドブックの整備	113館 (16%)
ミュージアムショップ等のピクトグラム(絵文字)の表示	31館 (4%)

(有効回答数707館)

表2 バリアフリー対応について

福祉車両駐車場を設置している館	641館 (74%)
スロープが設置されている館	518館 (59%)
福祉車両駐車場から館の入り口までの屋根を設置している館	98館 (11%)
駅やバス停から点字ブロックなどの誘導措置を設置している館	140館 (16%)
視覚以外の手法(手で触る等)でアクセス出来る館	382館 (44%)
視覚に障害がある人の観察・鑑賞を支援している館	187館 (21%)
車椅子トイレの設置館	689館 (79%)
ホームページで障害者支援の活動を紹介している館	41館 (5%)

(有効回答数873館)

計結果については表のとおりです。これらの調査結果から、博物館において対応が進んでいるものもありますが、まだ対応が進んでいない部分も多いこと

がわかります。文部科学省では、「誰にもやさしい博物館」を創るための方策について、引き続き調査研究を進めていきます。

文部科学省生涯学習政策局社会教育課

「誰にもやさしい博物館づくり事業」について

施策説明

鈴木 江戸東京博物館にも、多くのボランティアの方々がいらっしゃいますが、高齢者の方でボランティアをやりたいという方が、登録待ちで一〇〇人以上いると聞いていることがありますが、これは本当に、今の高齢者がいかに知的かということと、社会に自分のスキルを還元していく、そういう場として博物館というものが存在しているということを表しており、非常に感銘を受けました。

水嶋 江戸東京博物館には外国語ボランティアの方がたくさんいますね。英語はもちろんですが、中国、ハンデル、フランス語、ドイツ語もあると聞いています。そういった人たちが常に学んでいるんですね。そういう高齢者は元気だという気がしますね。

鈴木 例えばサポーターということ考えた時に、サポーターをする側とされる側でどちらがより人生の満足度が高いであるとか、幸福感があるか、といいますが、提供する側の方がはるかに強いんです。ボランティアについても同じで、語学能力はもちろん必要ですが、日本の文化に関する質問に対して、ちゃんと答えなければならぬ。そういったことを学ぶことについて、ボランティアの方の努力というものは、非常にすばらしいものだと思えますね。高齢社会暗黒論みたいなものは間違っていて、現実に見えてくることというのは、そういう方々の力が社会のリソースになるというものでしょう。これはボランティアだから無償ですが、賃金で換算したら何千億という資産なんです。このことは、きちんと私たちは認識しておく必要があるし、そのような力というものを大事にしていかなければいけないと思います。

中川 アメリカでは、もう五〇年ぐらい前から、これだけのボランティアに働いてもらってどれだけの財政的な利益があったかというのを調べているんです。私が海外から帰ってきて上野動物園に動物園ボランティアというのを創設したのは一九七三年なんです。その時にはまだボランティア活動を受け入れる素地がなくて、外国から帰ってきて変なことをやり始めたという声があったんです。今、生涯学習社会の中で、ボランティアといった存在がどうしても必要なんだという、大きな波は確実にこの社会のすべてに行き渡りつつあって、その波をつかまないと博物館は生き残れないと思います。

※すべての人々が健康で文化的な生活を送ることが出来るように、人々を孤立や排除から救い、社会の構成員として包み込むことを目指す概念。

水嶋 社会全体でボランティアをどうやって育て活用するかというのは、従来から言われてきていますが、バリアフリー社会や高齢社会に対応して、我々全員がサポーターになるためには、何が大切なのでしょうか。

鈴木 一人ひとりが本当に高齢社会にいるんだという実感です。私たちが必ずその一員で、そうなるし、それが特殊なことではないということですね。つまり、高齢者であれ障害者であれ、アシストすることが何か特別なことであるという概念を持つてしまうことが、一番大きな課題なのかもしれません。誰にもやさしい博物館というのは、一方向的に何かサービスを提供するという話ではなく、お互いの心のバリアを取り除くことが重要なのかもしれません。

水嶋 最後に中川先生にお聞きしたいんですが、今後、博物館がやさしい博物館づくりのために何をしなければいけないのか。その課題や将来像についてお伺いしたいと思います。

中川 私が一番感じていることというのは、このような環境の中にあつてまだ昔の残像を引きずっている博物館を運営する人間の側の問題です。博物館が人を迎える際に、本当に、エブリワン・ウェルカムという体制に、心の中であつていかない問題があると思います。例えば、視覚障害者が来た時にその人をスタッフの一人が展示室まで誘導する際に、体のどの部分を触ってもらったらいいのか、というようなことを、本当に知っているかどうか。要するにスタッフトレーニングというものが、おそらくここ数年一番重要だだと思います。まさに、人が人を迎えるわけですから、その部分がちゃんとなければ、これはいくら形だけ備えても宝の持ち腐れになってしまうと思います。今、日本博物館協会では、文部科学省から委託を受けて調査研究を行っているところですが、今後私たちは、このような所に精力をつぎ込んでいかなければいけないんじゃないかなと思っています。

中心とする海外の博物館にアクセスすると、情報の階層化がさらに多岐にわたっています。また、一つ一つの項目に関して、情報の記述が深く、そのうえ、対象別に細部にわたる行き届いた情報の整理と提供を展開している充実振りに驚かされます。

2 情報提供とマーケティング

博物館法の第二条には、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する様々な資料を収集、保管、展示することによって、利用者の教養の向上や調査研究等に資するとともに、資料の調査研究等を行う機関が博物館であるという定義が示されています。この「資する」という点に、今日、重要な鍵があると思います。この点を、博物館法では、博物館の事業として「案内書や解説書を用いてわかりやすく専門的、技術的な説明を行う」、「講習会や講演会、研究会等を行う」として定めています。しかし、よりよく「資する」ためには、展示、案内書、解説書、講習会以外に、情報提供の「ソフト」が、極めて大切になってきています。

誰に、どのような情報を、どのような方法論で、どのような状態で、どのような形態で提供するのが最適なのか。マーケティングの考え方に立脚して組み立

てることの必要性が高まっています。マーケティングは、企業の販売の問題解決だけを目的にした活動ではありません。供給する側と需要側における人間の行動や組織行動を解明する活動でもありません。博物館を利用する人、利用して欲しい人が潜在的に求めている情報と博物館が提供している情報がマッチしているかどうかです。

3 教育者向けの教育プランソフトの提供

例えば、海外の博物館では、多くの場合、教師向けのサイトが作られています。スミソニアン博物館では、教師の箇所をクリックしていくと、数段階にわたる教育指導プランまでもがPDFファイルで整備されています。教育の実際でもヒントになる有用な情報提供、ノウハウ提供です。アメリカではネットワーク基盤の整備が先行しており、豊富なコンテンツ制作も、人材や予算面でも可能な環境があったからと推察しますが、義務教育の現場に直結したコンテンツの提供は効果的です。また、博物館の知的資源が義務教育の教材として活用成果も明確になり、国民的な教養の基礎作りに確実につながっていきます。もちろんこれは、学習指導要領との関係もあり、米国の日本

では、背景の違いはあると思いますが、博物館の展示を子どもたちに見せる多様な教育展開案を教師に情報提供すること、マーケティング活動の一つです。

4 情報の編集機能の高度化

マーケティングに基づいた情報提供活動を多面的に展開していくためには、情報を編集する専門機能の導入と高度化が求められます。一般家庭には急速にハイビジョン放送と大画面テレビが普及し、私たちは茶の間にいながら、プラド美術館やウィットニー美術館の絵画を再現性の高い画像で見ることが可能です。例えばNHKなどにみるこうした分野の情報編集活動は、多形で、学習機能の高度化も合わせ、進化を遂げています。「編集」と言う言葉が簡単ですが、実は、この「編集活動」に深いソフトと専門技術が蓄積しています。当然、博物館における情報提供のソフトは、大衆的な映像放送とは異なり、アカデミックなバックグラウンドをもった編集活動も必要でしょう。知識基盤社会の核となる博物館をさらに活性化していく一つのアプローチとして、マーケティングの観点から情報提供機能を高度化し、コミュニケーションを有機的にしていくことを期待しています。

提言

博物館にみるマーケティングとコミュニケーション

東日本旅客鉄道株式会社顧問

江上節子



えがみ・せつこ 早稲田大学卒業。リクルート社にて、仕事情報誌「とらば一ゆ」、「週刊B-ing」の編集長を経て、産能大学経営学部助教授。その後、東日本旅客鉄道(株)フロンティアサービス研究所長を務める。現在は、同社・顧問。
公職に、中央教育審議会委員、厚生労働省労働審議会能力開発分科会委員等。
著書に「リーダーシップにおける未来」(2000年、同友館)、「デジタル時代の広報戦略」(2002年、早稲田大学出版、共著)他。

独立行政法人の組織形態に変わっても、早四半が経過しますが、この間、博物館や美術館の在り方は、社会環境の変化も手伝って随所に新たな試みが展開しているように見受けられます。とくに目立つのは、受付等の運営スタッフなどの外部委託や、ボランティアの活用、友の会やスポンサーシップの仕組みづくりなどです。利用者としての目から見ても、効率化に工夫を凝らし始めた博物館の姿は伝わってきます。ここでは、公共サービスの在り方と生産性や効率化の観点については論じませんが、今、急速に変わりつつある利用者のニーズと、博物館のこれからの政策で大切な情報提供の在り方を考えてみたいと思います。

1 Web上のデジタルアーカイブ機能の展開

私たちにとって、日常的にふれる知識や情報取得の環境が、インターネットと大容量デジタル回線の普及で大きく変わりました。注目しているのは、デジタルアーカイブ等、インターネットで二十四時間どこでも、アクセス出来、主要な所蔵物を見ることが出来る博物館、美術館における情報化の展開です。音声案内や、文字を大きくして読めるなどの配慮も進み、障壁者も、海外にいる方も誰もがアクセス出来るホームページは、誰にもやさしい博物館の条件でもあります。

今、私たちは、上野の博物館とスミソニアン博物館とルーブル美術館と大英博物館を同時に、比較しながらパソコン上で見ることも出来ます。そこには、それぞれの博物館や美術館の運営哲学、という経営ポリシーとでも言うべきものが基底にあってホームページの構成と編集が成されていることが感じ取れます。

日本の博物館においても所蔵品の画像も豊富になり、分野別、地域別、テーマ別とわかりやすく分類され、ホームページ上の情報提供は整備されています。かつてに比べれば、飛躍的に情報提供が進んだわけですが、しかしながら、米国の

事例紹介①

ボランティアとつくる展示案内 博物館における外国人対応

東京都江戸東京博物館

江戸東京博物館は、両国国技館が隣接し、多くの観光客でにぎわっています。また、隅田川の水の上バス乗り場もあり、上流の浅草や下流の浜離宮・お台場など東京の人気ある観光スポットともつながっています。また、周辺には安田庭園、東京都復興記念館などもあり、博物館の展示と合わせて、東京の歴史を知るには絶好の場所です。立地の影響もあり、江戸東京博物館は、外国人のお客様がとて多い博物館です。

博物館内のサイン表示は、日本語の他に英語・ハングル・中国語を併記しています。博物館のパンフレットは、英語・フランス語・スペイン語・ドイツ語・ハングル・中国語を用意しています。また、博物館内で働いているのは、案内係、警備員、エデュケーター、ボランティアなど多岐にわたります。特に江戸東京博物館では外国語の出来るボランティアがお

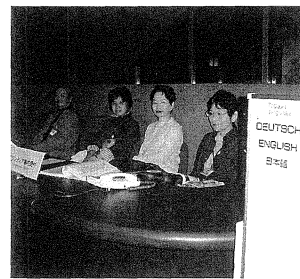
り、来館された外国の方からご好評いただいています。

ガイドボランティアの数は、英語九五八人、フランス語八人、ドイツ語七人、中国語五人、ハングル七人、スペイン語四人、ロシア語一人です。この他に日本語でのガイドのみを行うボランティアも一〇九人います。例えば、平成一六年度は英語だけを見ても、一年間に二六五三件（一件は一人から一〇人程度のグループです）、外国語でガイドした件数は三二四〇件にも及びます。

本来であれば、外国からの来館者も、日本人の来館者も等しく展示を楽しんでいたできるように、展示室で展示する資料のすべてに、日本語、英語、その他の言語を併記したキャプションを用意するべきであると私たちは考えています。しかし、常設展示室では、一か月に二回の展示替えを行っているため、すべての資

料に英語の表記をつけることすら、難しいのが現状です。しかし、ボランティアの方々は、展示資料について、それぞれの言葉でガイドをしますので、外国からの来館者も、日本人の来館者と同じように展示を楽しんでもらうことが出来ます。江戸東京博物館の展示は、ボランティアの力なしには成り立たないと言うことが出来るでしょう。

（学芸員 早川典子）



外国人来館者対応のボランティアの方々

事例紹介②

博物館と福祉部局の連携実践

～回想法・懐かしさがチカラを発揮する昭和日常博物館の試み～

師勝町歴史民俗資料館

愛知県師勝町歴史民俗資料館では、昭和時代、昭和三〇年代を中心とした生活資料の収集に力を注いでいます。本館が開館した平成二年には、埋蔵文化財と民俗資料の展示が主体でしたが、平成五年から昭和時代の資料収集を始め、その後、展示フロアはすべて昭和三〇年代という明確な方向性を出してきました。

現在「昭和日常博物館」とも呼ばれる館を前面に出しています。来館者の声は、「懐かしい」に始まり、なかでも高齢者が自らの言葉で笑顔とともに自らを語る場所にもなっています。

これを機軸として「思い出ふれあい（回想法）事業」が本町において展開されています。回想法ってなんだろう？博物館と高齢者ケアの関わりってどんなことだろうか？

回想法は、高齢者の記憶、特に誰しもが鮮明に覚えている子どもの頃の記憶を

思い起こし、語り合うことにより楽しい時を過ごし、それが高齢者ケア、さらには認知症や閉じこもりの予防になるという心理療法です。一九六〇年代にアメリカの精神科医が提唱した手法で、日本でも多くの研究事業が進められ注目されています。

博物館と福祉と医療は、回想法を用いての高齢者ケアをテーマとした瞬間、手と手を取り合いその目的を一つにすることが出来る、と思われませんが、現実には、博物館と福祉が連携を図ることは行政の縦割り構造から一般的に難しい現況にあります。まして、博物館と医療機関となるとその壁は思った以上に高いのかも知れません。

本町では、三者が連携することにより地域に根ざした高齢者ケアの取組が実現しました。

平成一四年度、国登録有形文化財「旧

加藤家住宅」内に拠点となる施設「回想法センター」を設け、歴史民俗資料館と総合福祉センターが協働し、地域の高齢者ケア、介護予防事業、まちづくりを展開しています。同時に、回想法の普及にも力を注ぎ、博物館、自治体、高齢者施設において導入が急速に進められています。

懐かしさが持つ持っているチカラを創造的に活用することにより、博物館資料、文化財建造物の新たな活用が始まりました。介護予防事業としては、保健士が主に事業をリードし、資料館は実物資料を貸出しするための「回想法キット」の製作、回想を求めて来館される高齢者施設の急増に対応するための「お出かけ回想法」の実施、サポートなどを展開しています。

こうした活動が広く伝わり、多くの地域において高齢者ケアと博物館が深く関わる事例が増していくことを期待しています。

（学芸員 市橋芳則）

誰にでもやさしい「ユニバーサル・ミュージアム」を目指して

神奈川県立生命の星・地球博物館

神奈川県立生命の星・地球博物館は、平成七年の開館以来、誰にでも「開かれた博物館」として、様々な博物館活動を展開しています。

博物館の建設計画段階からバリアフリー精神が採用されて、エレベーターやエスカレーター、障がい者用トイレ、福祉車両駐車スペースなどが設置され、さらに、入館料も障がい者と介助者、高校生以下と六五歳以上が無料であり、利用しやすくなっています。

また、触れる展示物（ハンズ・オン）があることや音声ガイド機器が用意されていることから視覚に障がいのある人にも好評です。盲学校をはじめ視覚に障がいのある人たちの利用に對しては、学芸員や誘導・案内ボランティアが協力・支援しています。音声ガイドやボランティアの導入にあたっては盲学校の先生方や視覚に障がいのある方との交流会、意見交換会、検討会などを開催し、なおいくつか良い方策をとることに努めました。

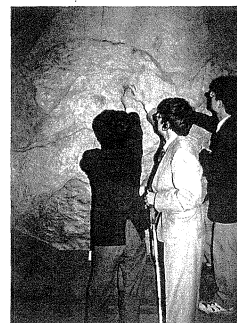
これらの取組を模索・試行する過程でバリアフリー思考からより進んだユニバーサルデザインの発想へと発展させてきました。一例に、開館三周年記念行事として開催した「ユニバーサル・ミュージアム」をめざして「視覚障がい者と博物館」のシンポジウムがあります。「ユニバーサル・ミュージアム」とは一つ一つのバリアを改善、クリアしながら、バリアフリーの実績の積み重ねによって、誰にでも利用しやすいミュージアムが目指されることを意味した言葉です。

ユニバーサルデザインには、決まった例がなく、最も使いやすいものを創り、多くの人が利用することによって、次にまた良いものが導きだされると考えます。平成一〇年度に当館が日本で初めて設置した「トーキングサイン・ガイドシステム」は、赤外線による音声歩行案内・解説装置で、かつて、文部科学省から委嘱された「科学系博物館ネットワーク推進事業」の中で開発し、その後、博物館施設等で赤外線による音声案内が導入される際に参考にされています。

平成一六年度には、職員による「ユニバーサルデザイン検討ワーキンググループ」が設けられ、積極的に課題を整理し、整備を進めています。例えば、誘導用プロット敷設箇所の再点検と改善、ガイダンス映像への文字情報の追加、ホームページの利用案内にバリアフリーサービスの表示、点字解説書の作成など、二二項目に及んでいます。

当然のことですが、障がいのある人に配慮された博物館は、すべての人が楽しめる博物館につながります。誰にでもやさしい「ユニバーサル・ミュージアム」への対応は、当館も含めて多くの博物館で、今後、ますます図られていくものと期待されます。

（専門学芸員 奥野花代子）



手で触れて感じられる「恐竜の足跡化石」の展示

レポート

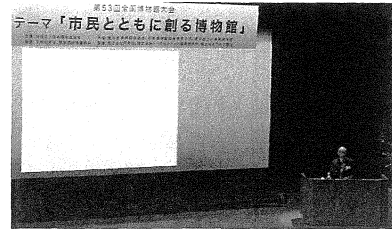
第五三回全国博物館大会レポート
「市民とともに創る博物館」

文部科学省生涯学習政策局社会教育課

平成一七年一月一七日（木）及び一八日（金）に第五三回全国博物館大会が、財団法人日本博物館協会、東京都博物館協議会・日本博物館協会東京支部、及び東京都江戸東京博物館の共催、並びに文部科学省及び東京都教育委員会の後援を受け、東京都江戸東京博物館（東京都墨田区）にて開催されました。

本年は、「市民とともに創る博物館」をテーマとし、博物館が友の会やボランティア活動などを通じて、住民や利用者の積極的参加を得て、対話を進めることで新たな協力関係を構築することを目指した検討が行われました。

第一日目、まず全体会として、冒頭に中川日本博物館協会の



東京都写真美術館・福原義春館長による記念講演

力関係を構築することを目指した検討が行われました。

大会においてはテーマに関するシンポジウムやパネルディスカッションも行われました。第一日目は、大会テーマについてのシンポジウムが行われました。まず、国立科学博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、神奈川県立歴史博物館、及び滋賀県立歴史博物館の三館からの報告が行われ、その後会場との質疑応答が行われました。国立科学博物館からは、体験学習支援及び展示学習支援ボランティアや外部との連携についての活動報告が行われ、ボランティアの意識の多様性や独立行政法

会長の開会挨拶、文部科学大臣祝辞の後、博物館界に貢献された方等に対する表彰及び優れた研究活動に対して贈られる棚橋賞の授与が行われました。

午後には、東京都写真美術館の福原義春館長による、「こんな博物館に行きたい」と題した記念講演が行われました。講演では、博物館は人々に感動を与える場であるとして、博物館を訪れない人々を取り込むことやメディアの活用的重要性について、また、将来の世代も見通した、社会的存在として博物館が持つべき責任を自覚していくことの必要性について話されました。

さらに、市立長浜城歴史博物館からは、持続的な地域づくりに結びつけた展示づくりや、市町村合併に伴う新しい市の一体感をつくるために、各自自治体の地域の歴史や民俗など文化面での理解を促進する「新市創設連続講座」など、博物館の外に「打って出る」活動等の報告がありました。第二日目には、「ボランティア・友の会」と「地域連携」のテーマに分かれ、より具体的な取組の報告を行うパネルディスカッション等が行われ、最後に大会決議がなされ盛会のうちに終了しました。

編集後記

新年、明けましておめでとうございます。
昔から『一年の計は元旦にあり』と申しますが、読者の皆様はどのような目標や計画を立てられたのでしょうか。新しいことにチャレンジするのもいいでしょうし、これまでやってきたことを継続するのも意味があることと思います。いずれにしても自分の可能性を高めていければいいのではないのでしょうか。最後になりましたが、今年も『マナビィ』をどうぞよろしく願っています。(S・A)

月刊

マナビィ



1月号

第55号

2006年1月1日印刷

2006年1月1日発行

著作権所有 文部科学省©

発行所 株式会社 ぎょうせい

本社

〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部

〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

TEL 03-5349-6666 (第1営業部)

URL <http://www.gyosei.co.jp>

印刷所 ぎょうせいデジタル株式会社

定価600円 本体571円 76円

年間購読料7,200円(税・送料込み)

- ・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
- ・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはほとりの書店にてお願いします。

●本紙掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

●添え付けのハガキでご意見、ご要望等をお寄せください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株)ぎょうせい第1営業部広告課

電話 03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

Printed in Japan 2006 ISSN 1346-6593

●この刊行物は再生紙を使用しています。

月刊

マナビィ



2月号予告

特集 青少年の意欲を 高める自然体験 活動

まなびの新風——あのまち・このまち——

宮城県七ヶ浜町

事例クローズアップ

加須市生涯学習セミナー

(埼玉県加須市)

おおた芸術学校

(群馬県太田市)

挑戦！企業が取り組む生涯学習

マイクロソフト株式会社

(東京都渋谷区)

本誌は、生涯学習の総合情報誌として多様な情報を含んだ紙面構成に努めております。読者の皆様に愛される紙面づくりのために、皆様からの貴重なご意見や感想が何よりも重要です。本誌へのご意見や感想、又は本誌に取り上げてもらいたい地域づくりの事例などがあれば、編集部までご連絡いただければと思います。
(編集部メールアドレス: chiiki@mext.go.jp)